

## 第28回神戸女学院大学英文学会報告

鵜野 ひろ子

2003年12月5日の小春日和の午後、第28回英文学会が開催されました。今回は立石浩一先生のご尽力で、本学卒業生で現在大阪大学言語文化部助教授の由本陽子先生に、「動詞の語形成と概念構造」について特別講演をしていただきました。由本先生は英語学の中でも形態論がご専門で、特に語彙意味論に関しては、日本における権威として、内外に広く知られておられます。1997年に出版された『語形成と概念構造』（研究社、影山太郎氏と共著）において、単なる接辞付加・複合などの形態操作のみならず、形態プロセスには統語構造・意味構造の組み換えが必然的に伴うものであるという考えを体系化し、日本語と英語の類似点・相違点を、一貫性のある理論的枠組みで分析・説明することに成功されておられます。今回のご講演は大変専門的な内容にもかかわらず、素人にもわかるように、平易な表現や具体的な例を使ってご説明いただき、皆大変勉強になりました。

発表の部門では、まず、2002年に本学大学院で博士号を取得された本学非常勤講師の伊藤麻里子先生が「バーナード・ショーの『リア王』—Heartbreak House」という題で、ショーとシェイクスピアの人となりや女性観を比較しながら、『リア王』と『傷心の家』の関連について発表されました。次に、2003年に卒業し、現在大阪大学大学院言語文化研究科在学中の江本礼美奈さんが、日本語におけるモーラ・タイミングについての研究発表をされました。若い研究者らしく、パワーポイントを駆使して、図表などを見せながらわかり易く解説され、これからの研究発表だけでなく、授業にも、パワーポイントがいかに効果的であるかというお手本を見せてくださいました。

残念なことは、せっかく素晴らしいご講演や研究発表がされているにもかかわらず、聴衆の数が

大変少なかったことです。これは、ここ数年の傾向ですが、一つには、本学会が金曜日の午後開催されているため、仕事を持っている方には出席が難しいということがあるようです。土曜日の開催の方がよろしいでしょうか？皆様から、いろいろご意見をいただきましたら、参考にさせていただきます。どうぞよろしくご意見申し上げます。

## 動詞の語形成と概念構造

由本陽子

接辞付加や複合という語形成は、すでにレキシコンに存在する語に何か新たな要素を付加するというプロセスである。従って、それらは既存の語が表わす概念の拡張ないしは変更であるということになる。生産性の高い語形成規則は、その意味の拡張ないしは変更という側面において非常に一般性の高い（すなわち「透明性」が高い）ものであり、だからこそ母語話者はそれほど苦勞せずこれらの規則を自由に使うことができているのだらうと思われる。しかし、たとえば、英語の *un-* は、*fold* 「折りたたむ」 / *unfold* 「(折りたたまれたものを) 開く」のように、基体が表わす行為の反対の行為を表わす動詞を作るのだが、「反対」というだけでは、漠然としていて、語形成規則として形式化することができない。本論では、これを形式



化し、一般化するには、概念構造を用いた分析が有効であることを示す。従来の語形成規則では、単に*un-*は他動詞に付加されるというだけで済ませていたところを、概念構造を用いて、*un-*が事象構造上のどの位置で否定の意味機能を果たしているのかをきちんと捉えることができるようにするのである。本論では、ケース・スタディとして*un-*、*re-*、*over-*を取り上げ、これらが様々な動詞との結合においてどのような意味機能を果たしているかを考察し、それぞれ以下のような概念構造レベルでの一般化が可能であり、また、意味の多様性は、結合する動詞との関係によって導かれることを示す。

- (1) *un-*接辞化は、CAUSE-BECOMEによって表される基体の概念構造において、最も深く埋め込まれた状態を表す場所関数を否定するNOTを挿入する規則と対応する。
- (2) *re-*接辞化は、基体の概念構造の中で、事象の終結時に成立している下位事象に、AGAINを付加する規則と対応する。
- (3) *over-*接辞化は、GOまたはBECOME関数を含む基体の概念構造において、着点を表す場所関数としてOVERを挿入する規則と対応する。

また、(1)-(3)のような規則は、各接辞が結合できる動詞の制限についても、意味的制約による説明を与える。たとえば、*re-*接辞化が基体のアスペクト素性によって制限されることは(2)から直接導かれる。さらに、本論では、新たに形成された概念構造とそれを具現する統語的形式との間の対応に関わる制限を仮定すれば、意味的には説明できない結合の制限についても、説明を与えられることを示す。

語形成、特に接辞付加において派生語の意味と共に従来関心を集めてきた問題として、新しく作られた語の下位範疇化素性もとの語の性質からどのように導かれるのかという「受け継ぎ」の問題がある。英語の接辞付加における受け継ぎは、非常に多様性があり「受け継ぎの原理」といったもので一般化することは困難であるが、上で示した接辞付加の規則を概念構造レベルで捉えるアプローチを用いれば、派生語の概念構造をもとにして下位範疇化素性や意味的選択素性を正しく予測することができる。たとえば、(4)のように*un-*が付加することで選択する前置詞が変わるのは、概念構造において着点にNOTが付加されることによるのであるし、また、(5)のように*over-*が自動詞を

他動詞に変えてしまうのは、概念構造においてOVER関数が挿入され、それが新たな項を要求するからだと説明される。この場合、目的語の選択制限は、OVERの項となり得るものの条件として考えることができる。一方、同じ*over-*でも、(6)では基体の下位範疇化素性の変更されない理由は、概念構造におけるOVERの項が結果状態を表す定項(SIMPLE)で満たされており、新たな項を必要としないからである。

- (4) a. He loaded goods onto a truck.  
b. He unloaded goods from a truck.
- (5) a. Mary shot the gun over the target.  
b. Mary overshot the target.
- (6) a. Don't simplify the rule too much.  
b. Don't oversimplify the rule.

このように、概念構造を用いた語形成分析は、各接辞の意味機能を形式化し、結合する動詞の概念構造の差異によって多様な意味が導かれることを説明したり、結合する動詞の制限を正しく予測するだけでなく、項構造や統語的概念を用いた先行研究では解決できなかったいわゆる受け継ぎの問題に対しても、かなり有望な新たな解決の道を開くものである。

## バーナード・ショーの『リア王』 — *Heartbreak House*

伊藤 (大江) 麻里子

バーナード・ショーは、『傷心の家(Heartbreak House) (1913-16年執筆)』を自らの『リア(Lear)』と呼んでいる。彼は、シェイクスピアの作品を深く愛すると同時に、それを超える劇作家になることを目指していた。二作品の関連を断片的に論じたものはいくつかあるが、いずれも部分的な比較におわっており、その相違の背景までは、論をすすめていない。そこで、本発表では、まず二つの作品の主人公を比較し、二人の劇作家の家族に対する姿勢を探り、ひいてはショーの晩年における人生観を考察した。

リアは、家族からの愛情を期待しすぎて絶望し狂気に陥ったが、ショトバーは、はじめから家族に期待することを諦めており、そんな愚かな「夢」を抱くことは、正気の沙汰ではないと考えている。『リア』を、愛情を言葉にして表現しなかったゆえにおこった父と娘の悲劇とみるならば、

ショーは、雄弁なヒロインに、父の欠点も含めて全てを受け入れる寛容な心を持たせることで、父親の魂を救おうとしたのである。すなわち、この作品自体が『リア王』に対する批評と考えることができる。

シェイクスピアとショーは、それぞれの作品を執筆した時期に、両親の死を経験している。ショーはアルコール中毒で生活力のない父親に絶望していた一方で、ロンドンに出て三人の子供を音楽教師として働きながら育てた母親に対して深い感謝と尊敬の気持ちを持っていた。父は、1885年にダブリンで家族に見守られることなく亡くなり、母は、1913年に亡くなり、その直後にショーはこの作品を執筆した。『傷心の家』においてショーは、妻と子供たちに見捨てられて寂しく独りで死んでいた父親に対する複雑な思いを、母親が亡くなってはじめて、表現したのだと考えられる。

## A Study of Mora-timing in Japanese

江本 礼美奈

大阪大学大学院言語文化研究科博士前期課程2年

日本語は言語の特徴のひとつとして、モーラを基準にした言語であると言われていています。このことは私たちの身の回りにある、俳句や短歌、しりとりなどを観察してみることでも分かります。しかしながら、日本語が本当にモーラを基準にした言語であるのかどうか、ということも多く音声学者が繰り返し分析を行っているにも関わらずその実態は明らかになっていません。本研究では特に補償作用に焦点を当て、日本語がどのようにリズムのタイミングを取っているのかということを実験を通して探っていきます。

まず、実験1では2モーラ語を対象に第二子音(C2)に対してモーラ内(V2)、モーラ境界を越えた母音(V1)の持続時間に補償作用の働きがあるかどうかを調べました。この実験では、全被験者において有声無声の違いによってC2に対してV2、V1に有意差(それぞれ $P < .01$ 、 $P < .05$ )が観察されました。つまり、日本語はモーラを基準にした言語であると言われてはいますが、実際にはモーラという単位よりも大きな部分でタイミングを取っているという可能性が観察されました。

次に、実験2では実験1で得られた結果を踏まえて、3モーラ語を対象に同様の実験を行いました。

ここでは補償作用がどの範囲で働いているのかということに注目し、モーラ境界を越えた後続する子音にも影響があるのかどうかを観察しました。この実験では、隣り合う分節音にはモーラ内、モーラ外に限らず大きく影響を及ぼしているが、離れた文節音には影響がほとんどない、という傾向が観察されました。

本研究では日本語のリズムのタイミングの取り方を探ることを目標に、いくつかの実験を行い、観察しました。そこでは、第二子音を中心にモーラを超えた母音、それからモーラ内の母音に補償作用が働いていることが分かりました。その一方モーラを超えた後続する子音には補償作用による持続時間の調節が希薄であるような結果に終わりました。つまり補償作用は3モーラに及ばず2モーラ以内で起きている可能性が指摘されます。しかし、このことは今回の実験だけでは確証できなかったため、今後より大きな規模での実験が必要であると考えられます。

### キャンパスニュース

\*Frances Devlin-Glass客員教授は、1年間の任期を終えられ、本年3月にオーストラリアへ帰国されました。

\*Janis H. Harris氏が、その後任の客員教授として、本年4月に就任されます。

#### <2004年4月より就任>

松縄順子教授 新任

#### 身分変更

保坂華子氏 2003年4月より獨協大学外国語学部英語学科特任講師に着任。

\*2004年度より文学研究科英文学専攻に通訳コースが立ち上がりました。

### 国際学会発表

#### \*朝日千尺氏

京都で開催されたD. H. ロレンス国際学会(2003年7月)にて研究発表。

#### \*Barbara Leigh Cooney氏

アメリカワシントン州で開催されたPeace and Justice Studies Associationにて研究発表。

**\* 橋本登代子氏**

関西外国語大学中宮キャンパスで開催されたThe 2nd International Conference on Speech Writing and Context Exploring Inter-disciplinary Perspectives (2003年8月6~8日)にて研究発表。

**\* 平井雅子氏**

京都で開催されたThe International D.H. Lawrence Conference (2003年6月30日~7月4日)にて研究発表。

英国ケンブリッジ大学で開催されたClare Hall ASH Colloquia (2003年9月16日)にて講演。

**\* 保坂華子氏**

英国、リーズ大学で開催されたThe 15th Euro-International Systemic Functional Linguistics Workshop (2003年7月)にて研究発表。

**\* 立石浩一氏**

チェコ、Prague Congress Centerにて開催されたInternational Congress of LinguistsXVII (2003年7月24~29日)にて研究発表及び司会。

**\* 山田由美子氏**

アメリカ、Newport Beach, CAで開催されたConference for Group for Early Modern Cultural Studies (2003年10月23~26日)にて研究発表。

**\* 吉田純子氏**

ノルウェー、KristiansandのAgder University Collegeで開催された、第16回International Research Society for Children's Literature (2003年8月9~14日)にて研究発表。

## 記念賞

2003年度、以下の英文学科学生に対して、次の学内の記念賞が授与されました。

大沢幸恵記念賞 E01161 藪野 純子

デフォレスト記念賞 E01092 永田 優佳

## 大学院生による学会発表

**\* 花川麻実子氏**

神戸女学院大学で開催された日本エズラ・パウンド協会全国大会(2003年11月1日)にて研究発表。

**\* 門口弘枝氏**

京都ガーデンパレスで開催された国際ロレンス学会(2003年6月30日~7月4日)にて研究発表。

**\* 高木範子氏**

駒澤大学で開催された日本ヴィクトリア朝文化研究学会第3回全国大会(2003年11月22日)にて研究発表。

## 会員による出版紹介

◇朝日千尺氏 飯田武郎編『D.H. ロレンスー詩と自然』松柏社(2003年1月刊)

◇馬場美奈子氏、戸田由紀子氏 『身体、ジェンダー、エスニシティー—21世紀転換期アメリカ文学における主体』英宝社(2003年9月刊)(鴨川・伊藤編、共著)

◇橋本登代子氏 トマス・ハーディ短編全集第2巻(高桑美子・内田能嗣 監訳)『貴婦人たちの物語』第四話「レイディ・モーティスフォント」訳

◇平井雅子氏 『Now, to Be!—今、生きる! 子規の世界』(神戸女学院大学英文学科学生・大学院生英訳チームよる、正岡子規「仰臥漫録」の対訳)遊タイム出版(2003年8月刊)

◇保坂華子氏 “Momo-taro: the Peach Boy.” In Watts, Eleanor and Paran, Amos, eds. *Storytelling in ELT*. LATEFL. (2003)

◇長尾ひろみ氏 『司法通訳』松柏社(2004年2月刊)(共著)

◇奥本京子氏 『ガルトゥング平和学入門—Introduction to Galtung's Theory of Peace: Grasping Peace for the 21st Century—』(ヨハン・ガルトゥング、藤田明史編)(共著・共訳)法律文化社(2003年9月刊)

◇立石浩一氏 『A New Century of Phonology and Phonological Theory: A Festschrift for Professor Shosuke Haraguchi on the Occasion of His Sixtieth Birthday』開拓社(2003年10月刊)(共著)

『西川誠司作品集』おりがみはうす(2003年7月刊)(西川誠司著、立石訳)

『折紙図鑑 昆虫II』おりがみはうす(2003年8月刊)(ロバート・J. ラング著、立石訳)

◇吉田純子氏

*Bridges for the Young: The Fiction of Katherine Paterson*. Scarecrow Press. April, 2003. (共著)

*The Presence of the Past in Children's Literature*. Greenwood Press. September 2003. (共著)

*Children's Literature & the Fin de Siècle, Westport*. Greenwood Press. November, 2003. (共著)

『少年たちのアメリカ—思春期文学の帝国と<男>』阿咩社(2004年2月刊)(単著)

“Telling a New Narrative of American Adam and His Manhood in *I Am the Cheese*” *Tinker Bell* (Japan Society for Children's Literature in English) 49. (2004年2月刊)

## 神戸女学院大学英文学会 会則

(1995年4月1日施行)

- (1) 名称  
本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。
- (2) 目的  
本学会は本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成  
本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生有志および本学英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動  
年一回、英文学会を開催する。  
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。  
その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。  
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

### 内規

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費など経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3)に関しては、KCELS専用の口座を利用する。

### 編集後記

学部の選択科目で通訳を勉強した4年生がめぐみ会主催の講演会の同時通訳を入れました。その他チャペルアワー、アッセンブリアワー、その他講演会の通訳を積極的に取り組んでいます。  
このNewsletterの作成にあたり、多くの方々にご協力いただきました。感謝致します。

### KCELS Newsletter 編集委員

(2003年度運営委員)

◇B. Cooney ◇長尾ひろみ ◇立石浩一 ◇鶴野ひろ子  
(ABC順)

### KCELS Newsletter No. 19

編集発行 神戸女学院大学英文学会  
〒662-8505 西宮市岡田山4-1  
Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532  
<http://www.kobe-c.ac.jp/english/kcels.html>  
2004年3月発行